

シンポジウム「宇佐美圭司《きずな》から出発して」

プログラム

司会 三浦 篤

東京大学大学院総合文化研究科教授

10:00

開会の辞

五神 真

東京大学総長

10:05

趣旨説明

三浦 篤

10:20-10:50

特別講演

「宇佐美圭司氏と《きずな》の思い出」

高階 秀爾

東京大学名誉教授・大原美術館館長

10:50-12:10

宇佐美圭司《きずな》について

《きずな》について

私が知っている二、三の事柄」

鈴木 泉

東京大学大学院人文社会系研究科教授

「美術史のなかの《きずな》」

加治屋 健司

東京大学大学院総合文化研究科准教授

ディスカッション

鈴木 泉+加治屋 健司

モデレーター 高岸 輝

東京大学大学院人文社会系研究科准教授

13:30-14:30

宇佐美圭司と戦後日本美術

「思考操作としての美術」

岡崎 乾二郎

造形作家・武蔵野美術大学客員教授

ディスカッション

岡崎 乾二郎

モデレーター 林 道郎

上智大学国際教養学部教授

14:35-15:55

東京大学と文化資源

「ものがそこにあることと

それが美術であることについて」

木下 直之

東京大学大学院人文社会系研究科教授・

静岡県立美術館館長

「美術が捨てられるとき」

佐藤 康宏

東京大学大学院人文社会系研究科教授

ディスカッション

木下 直之+佐藤 康宏

モデレーター 小林 真理

東京大学大学院人文社会系研究科教授

16:05-17:00

全体討議

問い合わせ先

〒113-8654 文京区本郷7-3-1

東京大学本部社会連携推進課

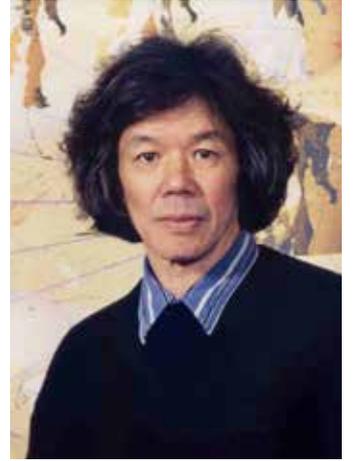
Tel: 03-3815-8345

E-Mail: shakairenkeika.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

プロフィール

宇佐美 圭司 うさみけいじ

1940年大阪府吹田市生まれ。画家。独学で制作を始め、1963年南画廊の初個展で注目を集める。1965年のワッツ暴動の報道写真から抜き出した4つの人型を用いて、グラデーションの帯や人体を内包する円を導入しつつ、記号化された人体からなる世界の構造を考察する絵画を制作した。1968年第8回現代日本美術展で大原美術館賞受賞。1972年第36回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表。1989年第22回日本芸術大賞、2002年芸術選奨文部科学大臣賞受賞。多摩美術大学助教授、武蔵野美術大学教授、京都市立芸術大学教授を歴任。主な展覧会に「宇佐美圭司回顧展」(セゾン現代美術館、1992年)、「宇佐美圭司・絵画宇宙」(福井県立美術館、和歌山県立近代美術館、三鷹市美術ギャラリー、2001年)、「思考空間 宇佐美圭司 2000年以降」(池田20世紀美術館、2007-08年)、「宇佐美圭司 制動 大洪水展」(大岡信こぼれ館、2012年)、「宇佐美圭司回顧展 絵画のロゴス」(和歌山県立近代美術館、2016年)。主な著書に『絵画論 描くことの復権』(筑摩書房、1980年)、『線の肖像 現代美術の地平から』(小沢書店、1980年)、『デュシャン』(岩波書店、1984年)、『記号から形態へ 現代絵画の主題を求めて』(筑摩書房、1985年)、『心象芸術論』(新曜社、1993年)、『絵画の方法』(小沢書店、1994年)、『20世紀美術』(岩波書店、1994年)、『絵画空間のコスモロジー 宇佐美圭司作品集 ドゥローイングを中心に』(美術出版社、1999年)、『廃墟巡礼 人間と芸術の未来を問う旅』(平凡社、2000年)など。2012年逝去。



岡崎 乾二郎 おかざき けんじろう

1955年生まれ。1980年代より数多くの国際展に出品。現代舞踊家トリシャ・ブラウンとのコラボレーションなど、つねに先鋭的な芸術活動を展開。東京現代美術館(2009-2010年)における特集展示では、1980年代の立体作品から最新の絵画まで俯瞰。2014年のBankART1929「かたちの発語展」では、彫刻やタイルを中心に最新作を発表。2017年には豊田市美術館「抽象の力—現実(concrete)展開する、抽象芸術の系譜」展を企画監督。著書に『ルネサンス 経験の条件』(文藝春秋、2014年)。

加治屋 健司 かじや けんじ

1971年生まれ。表象文化論、現代美術史。日本美術オール・ヒストリー・アーカイヴ代表も務める。共編著に『From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989』(New York: Museum of Modern Art, 2012)、『中原佑介美術批評選集』全12巻(現代企画室+BankART出版、2011年-)、共著に『マーク・ロスコ』(淡交社、2009年)、『地域アート 美学/制度/日本』(堀之内出版、2016年)、田中正之編『ニューヨーク 錯乱する都市の夢と現実』(竹林舎、2017年)など。

木下 直之 きのした なおゆき

1954年生まれ。文化資源学。静岡県立美術館館長を兼務。見世物、祭り、銅像、記念碑、博物館、動物園、城、戦争などを通して日本の近代について考えてきた。著書に『美術という見世物』(サントリー学芸賞)、『ハリボテの町』、『世の途中から隠されていること』、『わたしの城下町』(芸術選奨文部科学大臣賞)、『戦争という見世物』、『銅像時代』、『股間若衆』、『せいきの大問題』など。2015年春、紫綬褒章、2017年中日文化賞。ギャラリーエークワッドにてweb版展覧会「木下直之を全ぶ集める」を開催中 (<http://www.a-quad.jp/kinozen/index.html>)。

小林 真理 こばやし まり

1963年生まれ。文化資源学、文化経営学。文化資源の保存・公開・活用するにあたっての、文化行政および文化政策のための理論、制度、具体的に地方自治体においてどのように文化行政を推進していくかを研究している。著書に、『文化権の確立に向けて 文化振興法の国際比較と日本の現実』(勁草書房、2004年)、編著に『指定管理者制度 文化的公共性を担うのは誰か』(時事通信社、2006年)、『行政改革と文化創造のイニ

シアティブ』(美学出版、2014年)、『文化政策の現在シリーズ』全3巻(東京大学出版会、2018年)、翻訳に『文化資本 クリエイティブ・プリテンの盛衰』(美学出版、2017年)など。

佐藤 康宏 さとう やすひろ

1955年生まれ。日本美術史、特に室町時代末から江戸時代の絵画史。東京国立博物館資料課、文化庁美術工芸課を経て現職。著書に『伊藤若冲(改訂版)』(東京美術、2011年)、『日本美術史(改訂版)』(放送大学教育振興会、2014年)、『湯女図』(ちくま学芸文庫、2017年)など。共編著に『講座 日本美術史』全6巻(東京大学出版会、2005年)。共著に『The Artist in Edo』(Edited by Yukio Lippit, New Haven and London: Yale University Press, 2018)など。雑誌『UP』の439号(2009年5月)から「日本美術史不案内」を連載中。

鈴木 泉 すずき いずみ

1963年生まれ。哲学、哲学史。現在、哲学会(東京大学)理事。共編著に『ドゥルーズ/ガタリの現在』(平凡社、2008年)、共著に中畑正志編『岩波講座哲学 02 形而上学の現在』(岩波書店、2008年)など。芸術に関わる作物に「[[創作]] ジル・ドゥルーズとアラン・ロブ＝グリエ、デヴィッド・ボウイを語る 翻訳・構成 鈴木泉」(『文藝別冊 総特集 デヴィッド・ボウイ』河出書房新社、2013年)、河添剛監修『アッド・フォーク』(シンコミュージック・エンタテインメント、2009年)など。

高岸 輝 たかぎし あきら

1971年生まれ。日本美術史、中世絵画史。著書に『室町王権と絵画—初期土佐派研究—』(京大学術出版会、2004年)、『室町絵巻の魔力—再生と創造の中世—』(吉川弘文館、2008年)、共著に『日本美術史』(美術出版社、2014年)、『岩波講座日本歴史8 中世3』(岩波書店、2014年)、『日本美術全集9 水墨画とやまと絵』(小学館、2014年)、『天皇の美術史3 乱世の王権と美術戦略』(吉川弘文館、2017年)、『病草紙』(中央公論美術出版、2017年)など。

高階 秀爾 たかしな しゅうじ

1932年生まれ。西洋美術史、日本近現代美術史。東京大学文学部教授、国立西洋美術館館長を歴任。2001年レジオンドヌール・シュヴァリエ勲章、2012年文化勲章を受章。2015年日本芸術院会員。主な著書に『世紀末芸術』、『ピカソ 彫刻の論理』、『20世紀美術』、『フィレンツェ』、

『芸術空間の系譜』、『近代絵画史』、『美の思索家たち』、『名画を見る眼』、『近代美術の巨匠たち』、『ルネサンスの光と闇』、『日本近代の美意識』、『西欧芸術の精神』、『日本近代美術史論』、『ゴッホの眼』、『想像力と幻想』、『世紀末の女神たち』、『芸術のバトロネたち』、『フランス絵画史』、『日本美術を見る眼』、『西欧絵画の近代』、『日本絵画の近代』、『日本の現代アートを見る』、『西洋の眼 日本の眼』、『バロックの光と闇』、『日本人にとって美しさとは何か』など。

林 道郎 はやし みちお

1959年生まれ。近現代美術史、美術批評。主な著書に『静かに狂う眼差し』(水声社、2017年)、『死者とともに生きる』(現代書館、2015年)、『Natsuyuki Nakanishi』(New York: Fergus McCaffrey Gallery, 2014)、『Tadaaki Kuwayama』(Fellbach: Edition Axel Menges, 2014)、『絵画は二度死ぬ、あるいは死なない』全7冊(ART TRACE、2003-9年)など。共編著に『シュルレアリスム美術を語るために』(鈴木雅雄と共著、水声社、2011年)、『From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989』(New York: Museum of Modern Art, 2012)など。

三浦 篤 みうら あつし

1957年生まれ。西洋近代美術史、日仏美術交流史。単著に『近代芸術家の表象』(東京大学出版会、2006年、第29回サントリー学芸賞)、『まなざしのレッスン ① 西洋伝統絵画、② 西洋近現代絵画』(同、2001、2015年)、『名画に隠された「二重の謎」』(小学館、2012年)、『西洋絵画の歴史3、近代から現代へと続く問いかけ』(小学館、2016年)。共編著に『西洋美術史ハンドブック』(新書館、1997年)、『ジャポニスム入門』(思文閣、2000年)、『往還の軌跡—日仏芸術交流の150年』(三元社、2013年)、『西洋美術の歴史、19世紀』(中央公論新社、2017年)など。

